

研究課題

特別支援学校（病弱）に在籍する心身症等や慢性疾患の児童生徒に対するICTを活用した指導・支援に係わる実際研究

副題

学校名	熊本県立黒石原養護学校
所在地	〒861-1102 熊本県合志市須屋2659番地
児童・生徒数	124名
職員数／会員数	85名
学校長	田中 和敏
研究代表者	田中 和敏



1. はじめに

本校は、熊本県の北東部に位置し、病気のため生活規制の必要な児童生徒が治療を受けながら学ぶことのできる県内唯一の病弱特別支援学校である。隣接する独立行政法人国立病院機構熊本再春荘病院や自宅から登校する児童生徒の他、菊池病院や自宅で訪問教育を受ける児童生徒など小学部、中学部、高等部に合計124人が在籍している。教育理念に「共に生きる 愛と共感の教育」を掲げ、児童生徒一人一人の病気の種類に応じて病弱部、筋ジストロフィー部、重症心身障がい部、高等部、訪問教育に分かれている。

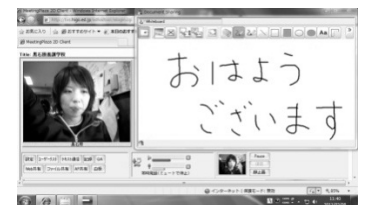
2. 研究の目的

特別支援学校（病弱）には、心身症等により通常の学級で不登校を経験したり、登校しても教室に入れなかったりする児童生徒の転入が増加している。また、重度の慢性疾患等のため外部との交流やコミュニケーションが制限される状況にある児童生徒もいる。このような児童生徒への学習や生活面の支援を進めることは意義深いことである。

本研究は、ICTを利用して教員の授業改善を図り、前籍校等との交流及び共同学習の促進に向けての実践的な取組を通して、特別支援学校（病弱）の地域における役割のモデル提示を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

今回利用したのは、熊本県立教育センターが提供しているテレビ会議システム（NTTのMeeting Plazaミーティングプラザ）である。予め、県の教育センターに申請、登録すれば必要ときに利用することができる。テレビ会議システムの利点としては、遠く離れた人と顔を見ながらリアルタイムで通信をすることができることがあげられる。また、教材やプレゼンテーション等を共有することができる。この利点を生かして一人一人の児童生徒の病状に応じて活用し、よりよい実践の在り方を探ることとした。



実際の活用画面

具体的には、以下のとおりである。

- ①本県で提供しているテレビ会議システムやコストのかからない周辺機器を活用することで、よりよい学習活動に活かしていく。
- ②テレビ会議システムを使い、対外的な発表会等に参加することで生活経験の拡大や充実感・満足感の高揚を図る。
- ③病気のため生活規制の必要な児童生徒に対して、テレビ会議システムを利用し、学習の補充や生活経験の拡大を図る。
- ④テレビ会議システムやインターネットを有効に授業等に用いて交流及び共同学習を進める。
- ⑤テレビ会議システム等のICT活用を通して、児童生徒の実態に応じた学習活動への活用を図る。

4. 研究の内容

(1) 童話発表会参加への取組

病状等により生活に制限のある児童たちに対して、テレビ会議システムを活用して校外で開催される地域の童話発表会に参加し社会参加への支援の在り方を探る。

(2) 病状により登校が限られる生徒への取組

病気のため生活規制の必要な児童生徒に対して、テレビ会議システムを活用することで、学習支援やクラスの友達との交流及び保護者への支援の方法を探る。

(3) 長期欠席の生徒への支援

病状により、自宅療養しているインターネット環境のない生徒への支援として携帯電話のテレビ電話を活用する。

(4) 自宅療養の児童への取組

喘息やアレルギー等により、学校に通うことのできない児童に対して、テレビ会議システムを活用した学習支援を通して、病状等により自宅療養をしている児童生徒への支援の在り方を探る。

(5) 買い物学習での取組

病状や天候等により、商店等での買い物が難しい場合には、テレビ会議システムを活用して、リアルタイムで商品を選び、購入する活動を通して、生活経験の拡大を図る支援の在り方を探る。

(6) 難病の子どもの親の会との交流

難病の子どもを抱える親の会とテレビ会議システムを通して、病状に関することや病弱教育についての意見交換等を行う。遠隔地との意見交換の場を設定することで、幅広い情報の共有や発信等の在り方を探る。

5. 研究の経過

(1) 童話発表会参加への取組

本校と地域の市民ホールで開催される童話発表会会場をテレビ会議システムで結び、本校から小学6年生と5年生2人の児童が発表をした。また、会場からの各学年の代表の児童の発表の様子を視聴した。発表後の感想は、「緊張せずに発表できた」「落ち着いてできた。見てもらえてうれしかった」と笑顔で話していた。

また、保護者からも「聞いてもらえてよかった」と前向きな感想があった。この経験を生かして、文化祭やその他のい



童話発表会参加の様子

ろいろな活動に意欲的に取り組む姿を見ることができた。また、この取組は、地元の新報にも掲載され、病状等により生活に制限のある児童に対してテレビ会議システムを活用することで、今までできなかった外部との交流やコミュニケーションの幅を広げることが可能になることを紹介することができた。



熊本日日新聞社の記事

(2) 病状により登校が限られる生徒への取組

学校と家庭をテレビ会議システムで結び、その日の体調に合わせて国語や自立活動、学活等の授業を配信した。国語（漢字の成り立ち）の授業では、書画カメラを用いて、板書したものや教科書、プリント等を配



国語の授業の様子

信した。家庭から教師の問いかけに答えたり、クラスの子どもたちの様子を見ることができ、遠隔でありながらも授業を共有することができた。感想の中に「一緒にできてよかった」「楽しかった」とのコメントがあった。また、授業の中で、マウスやタブレットでは入力しにくい点があったため、タッチパネルを授業で活用した。生徒が直接に入力したり、ノート代わりに使用することで、学習を効果的に進めることができた。

(3) 長期欠席の生徒への支援

インターネット環境のない自宅で療養している生徒に対して、保護者の携帯電話と職員の携帯電話を活用して学部の子どもたちとの交流を図った。内容としては、テレビ電話の画像を大型モニターで映し、お互いに近況報告や保護者との意見交換を行った。初めは恥ずかしそうにしていたが、慣れてくると普段どおりの笑顔でクラスの子どもたちと話すことができていた。クラスの子どもと話せたことで、心理的安定に繋がった。

(4) 自宅療養の児童への取組

病状により限られた人との関わりだけになってしまいがちであるが、テレビ会議システムを活用して、同年代の児童との合同学習を行った。図工での取組では、七夕の飾り付けを家庭と学校で同



自宅での活用の様子

時に行った。お互いに作り方を教え合い、作成したものを画面を通して見せ合うなど、日頃は体験できない時間を共有することができた。

(5) 買い物学習での取組

これまでの調理学習では、予め教師が食材等を準備していた。実際に商店で商品を買った経験が少ないことから、Bモバイル（日本通信社）を用いて、商店の商品をテレビ会議システムを通して、学校に配信し児童



商品を選んでいる様子

たちが実際に調理に必要な食材を選んだ。児童たちは「これ家にあるよ」「もう少し近くで見せてください」「この商品にしてください」と主体的に選んでいた。梅雨の時期だったが、実際にその場所に行くことができなくても、モバイルを活用することで身近に体験することができた。

(6) 難病の子どもの親の会との交流

県内の難病の子どもの親の会と本校職員との意見交流を行った。同時に国立特別支援教育総合研究所の西牧謙吾先生と本校をテレビ会議システムで結んだ。難病と闘いながら社会で働いている女性からは、子ども



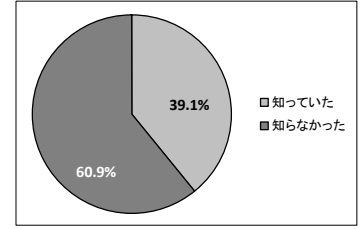
情報交換の様子

の時からどのように病気と向き合ってきたか、幼児の保護者からは、これから育児だけでも大変であるが、子どもの病気とどのように向き合っていけばよいのかなど、今抱えている悩みを聞くことができた。西牧先生からは、病弱教育に関する話や特別支援学校についての話があり、参加者との意見交換も行うことができた。遠隔地との意見交換の場を設定することで、情報の共有や発信等の在り方を探ることができた。

6. 研究の成果と今後の課題

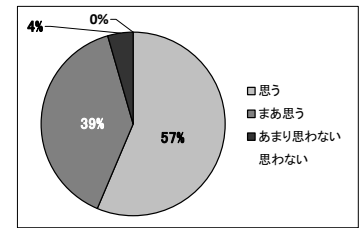
児童生徒の実態に応じて、テレビ会議システムを活用してきた。テレビ会議システムの活用は、一つ一つの実践事例から児童生徒の今までできなかった生活経験やコミュニケーションの拡大につながるものと期待できる。また、これまでの取組を地域の小・中学校及び特別支援学校の先生方にも伝え

ようとテレビ会議システムの活用についての研修会を開いた。当日は、本校職員を含め約 150 人程度の参加者があった。研修会後のアンケート結果では、参加者の約 60%が熊本県のテレビ会議シス



熊本県のテレビ会議システムを知っていましたか

テムを知らなかったと回答し、知られていない現状がわかった。また、テレビ会議システムは教育活動に有効であるとした問いには、参加者の 90%が有効であると興味・関心の高さをうかがうことができた。その中で有効な活用法として、「不登校の生徒への活用」「友だちづくりや社会とのかかわり」「職員研修」などについて実践してみたいとする回答が多くあった。このことから児童生徒へのよりよい支援のツールとして期待できると考える。



テレビ会議システムは教育活動に有効だと思いますか

今後の課題としては、

- ①今後も児童生徒の実態に応じた学習場面や行事等に応じた活用が必要であり、その中で、児童生徒のコミュニケーションの幅を広げる支援の在り方を探ること。
- ②テレビ会議システムを利用する上でよりよい提示を行うためにも、デジタル教科書等を併せて活用することで、より有効的な学習活動に生かす支援を探ることが挙げられる。

7. おわりに

貴財団の研究助成をうけ、テレビ会議システムを活用した実践研究に取り組むことができました。実践の中で、数多くの児童生徒や保護者の笑顔に出会うことができたことは、テレビ会議システムのこれからの可能性の高さを示すものであると感じています。

最後になりましたが、本研究に快くご協力いただいた国立特別支援教育研究所の西牧謙吾先生、熊本県教育庁の柿下耕一指導主事、熊本県立教育センターの村上豊優指導主事に心からお礼申し上げます。併せて、対象の児童生徒並びにご家族の皆様にお礼申し上げます。